

学習院アーカイブズ ニューズレター

16

Gakushuin Archives Newsletter 2020.7.15 vol.



学習院大学蓼々会食堂メニュー 昭和34(1959)年と
食堂内で談笑する学生 昭和31(1956)年

当時、学生食堂は現西1号館地下にあった。親子丼やカレーライス、寿司などのご飯ものが売切れになっている。「ハウザー」とは、栄養価の高い飲食物だろうか。(『学習院大学の50年 写真と図録』)

Contents

「大学の将来研究委員会」について

学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 2

学習院妙高高原寮 お世話になりました！

学習院アーカイブズ 近藤 順子 4

日常にあるアーカイブズの種、育ててみませんか

学習院アーカイブズ 小根山美鈴 6

主な活動 (2020年2月～6月)

..... 8

「大学の将来研究委員会」について

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1960年代後半、日本の多くの大学で発生した紛争は、1969（昭和44）年から学習院大学にも波及した。学習院における紛争は他の大学と比較して学校機能が麻痺するほどの規模とはならなかったが、紛争を機に教員間にも大学改革の機運が生まれ、同年8月、近藤正夫学長は「全学生諸君へ」と題するパンフレットを送付して改革に対する大学の基本的姿勢を示し、「大学の未来像を描きだすための討論」を始めると宣言した。そして12月1日、学長の諮問機関として「大学の将来研究委員会」が発足した。委員会は12月10日の第1回以降、合宿を挟みながら1971（昭和46）年3月までに37回の会合を開催し、1970（昭和45）年3月31日に第一次中間報告、9月30日に第二次中間報告、71年3月31日に最終報告を近藤学長に提出した。その後、中間報告に寄せられた意見を参照しながら全体にわたり再検討と修正が行われ、同年12月1日付で、B5判102頁の『大学の将来研究委員会 報告』が印刷・配布された。委員会の委員は以下の通りである（職位は委嘱当時）。



『大学の将来研究委員会 報告』
（学習院アーカイブズ蔵）

委員長 児玉幸多 教授（文学部）
委員 林屋礼二 助教授・香山健一 助教授（法学部）
河野豊弘 教授・島野卓爾 教授（経済学部）
加藤泰義 教授・高木進 助教授（文学部）
木下是雄 教授・米田信夫 教授（理学部）
飯坂良明 教授・稲村松雄 教授
（一般教育部会）

委員は何れもその後の大学運営の中心を担う教員で、現在は全員鬼籍に入っている。中間報告や最終報告の概要については、『学習院大学五十年史』下巻（2001年刊）にまとめられており、報告作成に至るまでの文書の一部も学習院アーカイブズに残され

ているが、議事録のような37回に及ぶ委員会の活動記録は、残念ながら現存が確認されていない。最終報告の目次構成は次の通りである。

- 第1章 この報告の性格
- 第2章 教育・研究面における将来の本学のすがた
- 第3章 図書館
- 第4章 すぐれた学生をむかえるために
- 第5章 財務面の改革
- 第6章 学習院全体としての意思決定機構の改革
- 第7章 大学の意思決定機構の改革
- 第8章 事務ならびに職員一般に関する改革
- 第9章 学生組織
- 第10章 つぎのステップ



近藤正夫学長（中央）と大学の将来研究委員会メンバー
（1970年6月、大磯での合宿時に撮影か、学習院アーカイブズ蔵）

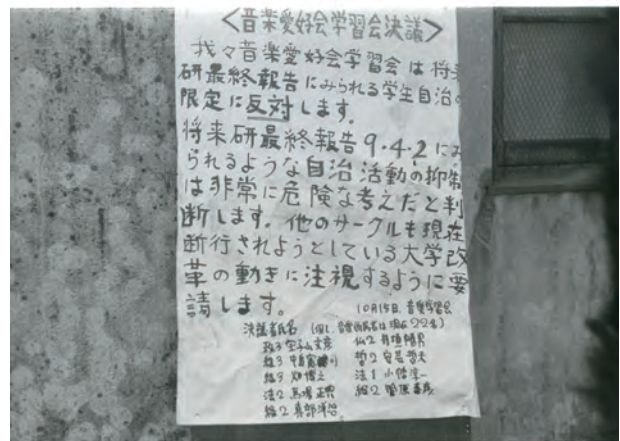
報告の概要を一部紹介すると、第1章「この報告の性格」に、「大学の使命は教育・研究にある。したがって、報告の根幹をなすのは、第2章 教育・研究面における将来の本学のすがたである」と述べられている。その第2章では、「本学は〈多様化する大学〉のなかで最もアカデミックな線をねらう：すなわち、いわゆる一般社会人・教養人の養成にあたるというよりは、むしろ各分野の専門家、または研究者の養成に主眼をおく研究・教育機関たることをめざすべきである」との主張がなされた。続いて「大学を卒業することによって得られる学士号が、就職試験の受験票になる（極端な場合には就職の資格として通用する）」という事態が、大学のあり方をひど

くゆがめている」という認識から「卒業」制度を廃止し、卒業証書に代わって単位取得証明書の発行が提言されている。また学部教育について、従来の学部に対応する教育上の組織体として、人文科学・社会科学・自然科学の3学部を設置し、学科の区分を廃止するとともに、外国語教育センター・保健体育センターや研究所の設立が挙げられている。その根拠として「大学の教員にとって、研究はいわば生命の泉である。教育へのエネルギーもここに汲まれる」という認識も示された。

第2章が「現前の現実には縛られず、しかし現実にも基盤をもつ可能性の枠のなかで考えるという方針」である一方で、第4章以下では、「現実から出発して理想像に近づく方策を論じるので、内容がかなり具体性を帯びる」(第1章)内容の提言がなされた。推薦入学制度の導入、大学の意思決定機関としての大学運営会議の設置、輔仁会の解散と新たな学生自治組織の設置等々、当時としては斬新な提案が行われている。そのなかには後年に至って実現した提案もあれば、実現に至らなかった提案もあるが、大学の将来研究委員会の報告は、その後の学習院大学の進路のひとつの指針となり、1972(昭和47)年から始まる学習院百年記念事業の構想にも大きな影響を与えたと思われる。

『学習院百年史 第三編』(1987年刊)の「第三章第六節 法学部の伸展」は、報告書に示された改革案について、「現状を冷静に、大胆に分析し、さらに進んで大学の未来像を展望しつつ、旧制度を吹き払う新風のような改革案を列挙している。今日これを読めば、四十四年度から四十五年度にかけての学内学生運動に対向して、学部と大学がその擁する人材をあげて、いかに現状を把握しようとしたか、委員会がいかにその知性とエネルギーを傾注したか、を知ることができる」と高く評価した。他方で、改革案が「その後、幸運な実現への道を歩みえなかった。何よりもまず、その内容や精神が大学の諸段階において議題とされ討議されるに至らなかったのである。それがいかなる事情と理由によるのかは審らかになしえなかったが、傾聴すべき指針の数々が示されたことは記憶に値するし、その内蔵される批判的知見と払われた労力には深い敬意を表さなければならないだろう」と記している。筆者は法学部の教員と推測され、おそらく当時の将来研究委員会委員の奮闘を身近で感じていたのであろう。

大学の将来研究委員会報告に対する学生の反応を



「音楽愛好会学習会決議」(1971年頃、学習院アーカイブズ蔵)

みると、『学習院新聞』(1972年10月23日発行205号より『学習院大学新聞』に改題)は、2度の中間報告の全文を紹介し、改革論の行方に大きな関心を寄せた。上記の画像のように、最終報告に学生自治活動の抑制を見出し批判決議を発するサークルも現れた。最終報告の公表にあたって『学習院新聞』(1971年10月29日)は、中教審答申に沿った内容であり「根本的な問題である大学の理念は、全く伺われない」と批判を強める一方で、問題点は学生にも存在することを次のように指摘している。

具体的な内容に関しては、評価できる面があるが、まず大学を改革していく場合の、大学人の姿勢意欲といったものが問題となりそうだ。またその辺に問題がある限りは、なんら根本解決がなされないという事にもなる。(中略)しかし一般学生の、最終報告に対する反応は鈍く、関心は薄い。それはこの改革が五年～十年先のものである事から、切実な問題でなく、「我々には関係ない」という考えがある為と考えられる。

日本の大学では1990年代以降、現在に至るまでさまざまな改革が提唱され、実施されてきた。そして2020年、コロナウイルス禍は社会のあらゆる部分に変容をつきつけた。「新たな生活様式」が求められるなか最も影響を受けたのが学校教育であり、学習院大学でも学生がキャンパスへの通学を制限され、オンライン・オンデマンドでの授業が実施される状態が続いている。こうしたなか、半世紀前に議論された大学の将来構想がどのようなものであったか、その構想検討に携わった人々の思いは如何なるものであったかを、残された資料から検証することは決して無駄ではないだろう。

学習院妙高高原寮 お世話になりました！

学習院アーカイブズ 近藤 順子

学校法人学習院の所有する校外施設は、現在、沼津游泳場（静岡県）、妙高高原寮（新潟県）、日光・光徳小屋（栃木県）、西田幾多郎博士記念館・寸心荘（神奈川県）の4施設です。沼津游泳場は各学校が臨海学校行事にも使用し、妙高高原寮と日光・光徳小屋は、大学生のゼミや部活動の合宿・研修会、卒業生や在校生の旅行などに利用されています。（西田幾多郎博士記念館は、研究・教育目的の使用に限ります。）

その中で、新潟県妙高市池の平に位置する学習院妙高高原寮は、本年令和2（2020）年9月末日をもって、約57年の歴史に幕を下ろすことが決まりました。今回、その歴史の一部をここに紹介し、大きな感謝の気持ちを示したいと思います。



妙高高原寮（2代目建物）全景

開寮のいきさつ

学習院アーカイブズには、『学習院百年史』（全三編、昭和55～62年発行）の編纂の折に、関係者から集められた多くの原稿が残されています。その中に、小西謙元学習院女子短期大学教授（以下小西教授）による「妙高高原寮誕生余談」（昭和49年4月記）という文章があります。小西教授は、昭和33（1958）年4月より、「短大次長、兼ねて国文学専攻主任教授」として学習院女子短期大学へ着任し、当時は安倍能成女子短期大学学長が院長との兼務で主に目白キャンパスでの執務だったため、小西教授が実質の学長としての立場を着実に務めました。

その文章に依りますと、妙高高原寮の発端は、昭和36（1961）年頃から学生の間で校外施設の増設について希望が起り、いくつかの調査が行われながらも値段の折り合う適地はなく、時間が過ぎていた、

ということから始まります。そのような時に、妙高高原池の平にあった季節限定で営業をしていた旅館の別館を、経営の都合上、本館主人がどこか学校関係へ山の家として売却したいとの希望があること



小西謙教授
（昭和40年 女子短期大学卒業アルバムより）

が、小西教授の耳に入ってきました。昭和37（1962）年の夏休みが始まる頃です。小西教授は、8月にまず自ら現地へ向かい、回りの環境や建物の状況を確認した上で校外施設のための適地と判断し、当時の

小山直彦学習院常務理事に話をしています。学習院着任前には長野県の松本中学校、松本深志高等学校で校長を務め、また長野県教育長時代を含めて山やスキーの造詣も深かった小西教授ですので、学生達のための山の寮への想いも強くあったことでしょう。また当時の堀部健一学習院女子中高等科長は元新潟県の教育長で、小西教授の友人でもあり、池の平周辺の土地勘があるので意見を求めたところ、積極的にあと押しをして薦めたということです。

その後、学校関係者による詳しい諸般の調査や理事、学生部長、卒業生委員会委員などによる視察も行われて、話が一気に進み、この旅館別館の使用に関する仮契約調印が、同年12月7日に無事結ばれ、土地と建物を買取る運びになりました。昭和38年度の開寮期間は、夏・冬期の各休暇期間中とされて、翌39年度からは通年の開寮となっています。

卒業生の想い

開寮のいきさつは、この原稿記録の他にも、『学習院新聞』119号（昭和38年4月）に掲載の「卒業生二年ごしの「贈り物」—「妙高高原寮」が生まれるまで—」という記事（113号、118号にも関連記事）や、何度かの理事会記録でも知ることが出来ますが、ここには「卒業生からの寄付」という興味深い話も加わります。その当時、毎年卒業生が一人200円ずつを出し合い、全体で15万円程度のものを在校生に記念に贈っており、卒業生委員会（記念品委員会）が

それをまとめていました。それまでの記念品には、テレビや正門の表札などがありました。昭和36年度並びに昭和37年度卒業生委員会は、在校生へのアンケートの結果も考慮して、校外施設設立資金の一部寄付を記念品としました。土地と旅館の全建物を買取った金額の一部とは言え、卒業生の想いも妙高高原寮に注ぎ込まれることになったのです。昭和38(1963)年には、卒業生代表が現地を訪れ、東京から送られた木材や文字を使って寮の看板の作成を手伝った時の写真も残っています。



卒業生代表・中溝氏と肩車上の高橋忠樹氏(当時3歳)
出来たての看板の前で(昭和38年)

開寮当時は、木造2階建て、40名収容の元旅館別館を使用したものでしたが、電気こたつだけの大変寒い室内だったようです。その後は増築を重ね、現在の妙高高原寮は2代目で、昭和62(1987)年10月に鉄筋コンクリート造、地下一階、地上二階の暖かい建物に建て替えられました。和室8室42名収容、スキーやハイキング、研修など、各種使用目的に適した宿舎になりました。そしてこの寮の大きな魅力の一つは、温泉を備えた施設であるということです。引かれている温泉は、日中に沢山動かした身体を癒してくれる、妙高池の平温泉の単純硫黄温泉で、寮のボリュームある食事と共に人気のポイントになっています。



冬の妙高高原寮(初代建物・昭和40年頃)
屋根の上での除雪作業も重労働です。

寮の管理

昭和38年に開寮となり、最初の管理人となったのが高橋マサ子氏で、現在管理人の高橋忠樹氏のご子息です。マサ子氏が平成10(1998)年までの35年間、忠樹氏がその後の22年間、妙高高原寮をずっと守ってきました。忠樹氏は大学進学のために一度妙高を離



初代管理人の高橋マサ子氏(右端)
(昭和58年頃)

れましたが、3歳のころからこの場所に住んでいた生粋の「学習院妙高高原寮っ子」です。自らがこの妙高池の平の土地を知り尽くし、寮を訪れた学習院関係者にその素晴らしい自然を紹介して手厚く世話をし、冬場の積雪量は3~4mとなる豪雪地帯に建つ寮をしっかり管理して守ってきました。まさにこの寮57年の歴史は、高橋家の歴史でもありました。学習院の職員や学生には家族ぐるみの付き合いをしている者もあり、人間同士の深い繋がりが、暖かい言葉のやりとりや雰囲気を作っています。客室は襖で仕切られてはいても、山小屋に近いアットホームな空気を作り、大学のスキー部員などは年に何度も利用して、スキーに精通した管理人の話を織り込み、青春の貴重な時間を紡いだことでしょう。

9月でお別れとなりますが、利用者の心の中には、いつまでも大切な思い出として、妙高高原寮は存在し続けていきます。



管理人・高橋忠樹夫妻

日常にあるアーカイブズの種、 育ててみませんか

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. アーカイブズとは

アーカイブズという用語には、大きく3つの意味があります。(1)組織または個人の活動に伴って作成・収受され、保管される文書のうち、重要なものとなる記録のまとまり、(2)記録のまとまりを将来のために保存する機関、(3)記録のまとまりを保存する場所です^{*1}。そして、アーカイブズの運用管理に専門的に従事する人をアーキビストと呼びます。ちなみに、学習院アーカイブズは、(1)~(3)までを満たす組織として位置づけられます。このように述べてしまうと、アーカイブズは特別な記録を扱う場所であり、私達の生活とはどこかかけ離れた存在と受け止められるかもしれません。

一般的には、メールをアーカイブする、デジタルアーカイブ、アーカイビングなどの言葉を見聞きします。これらは主にデータの保存やその機能を使うこととして用いられることが多いです。冒頭のアーカイブズの意味と異なるようにも見えますが、根っここの部分では通ずる面があるようにも思われます。

本稿では、その「根っここの部分」に焦点をあて、筆者自身の経験を踏まえながら掘り下げてみたいと考えています。アーカイブズの定義でいうと(1)に相当します。

2. 個人のアーカイブズ

- (a)ピアノの楽譜
- (b)小学生時代の自由研究作品「おたふく記」
- (c)ノート「発明ノート」「授業ノート」
- (d)絵画作品「カンナ」「スーホの白い馬」
- (e)学生時代の名札、生徒手帳、卒業証書類
- (f)スケジュール帳
- (g)写真（アルバム、山積みの写真、画像）
- (h)空手胴着、ヨガ用具
- (i)書籍類
- (j)パソコン等関連機器

上記は、恥ずかしながら筆者自宅の部屋・タンスをざっと見渡し、目に入ったものです。(a)~(e)は幼

少期や学生時代にさかのぼる頃のもの、(f)(g)は若い頃から現在に至るまで作られ、日々増えていくもの、(h)~(j)はある時点で購入し使うけれど、日々の整理整頓で廃棄し、違う何かとなる可能性のあるものです。筆者は、年月を経る過程で要るもの・要らないものを自ずと選別し、部屋やタンスをバージョンアップさせていることがわかります。具体的に、(a)~(e)は筆者自身が年月を経ても変わらずに持っていたいもの、(f)(g)は持っていたいが、特にデジカメやスマートフォン等で撮影した画像、アルバムにも入れていない紙焼き写真の山などについては、選別の必要があるもの、(h)~(j)は将来的にきっと大切にしておきたいものだけが残っていくもの、このようなものが筆者のアーカイブズとなる資料になります（図1）。

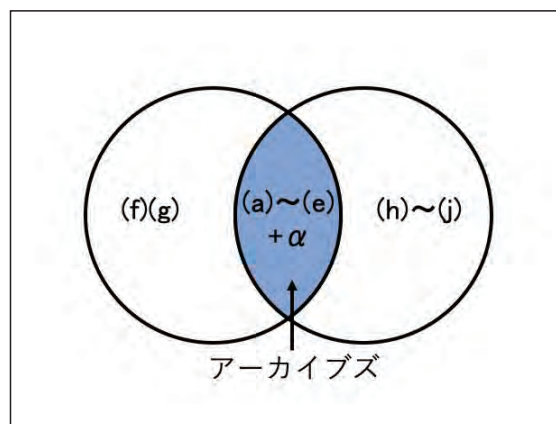


図1 筆者の部屋・タンスの資料

他方、(a)のピアノの楽譜は全部で30冊程度存在し、譜面に書き込みも見られます。1冊単位で見るとただの出版物ですが、30冊まとまって残ることに意味をなします。なぜならば、筆者のピアノ練習の軌跡を追えるからです。このように、何を残すのかという観点だけではなく、なぜこのように残したのかという筆者自身の考え方を資料のまとまりに投影させることも、アーカイブズには重要な情報源となります。皆さんもこのような観点からご自身の部屋を眺めてみてはいかがでしょうか。

3. 組織のアーカイブズ

筆者は、これまでに民間企業、次に国立大学で勤務しました。それぞれに特徴がありますので少しだけご紹介します。

(1) 企業のアーカイブズ

大阪に本社のある出版会社のアーカイブ部門に所属し、クライアントに向けてアーカイブズ導入の企画・提案、実作業やコンサルティングを行っていました。クライアントは企業や学校が多く、特に印象に残るのは電機メーカーS社です。

S社は、筆者が関わる2年前にP社の完全子会社となり、会社機能もほぼ吸収されていました。あと約1年で残りの社員も会社ビルから完全撤去しなければならない中、アーカイブズプロジェクトが立ち上げられたのです。それは社史制作および社史に用いた商品の写真や最低限の資料をデジタル化し、データベース化したものをP社へ提供することでした。このデータベースの担当が筆者でした。

しかしS社には、過去の商品やカタログ、CM映像他、経営にかかわる膨大な資料の保管庫が各地に存在し、ミュージアムもありました。そこで筆者は、これらを廃棄するには日本の商品史を語る上で証拠を失くすこと、デジタル化したところで現物がなければ、将来的にデータベースが使えない環境に陥った場合、歴史そのものを失う可能性のあることを説明し、できるだけ多くの資料をP社へ移管する提案をしました。同様の考えを持っていたS社担当者の働きかけもあり、この提案は受け入れられました。筆者は資料調査の上、移管候補となる資料の選別基準を提示した後、S社と相談を重ねながら選別しました。移管に相当しない資料については、外部の博物館等への寄贈を進めました。結果、約47,000点の資料がP社へ移管されたのです。この過程で、S社担当部署である広報室の文書の選別も同時に行いました。

おそらくS社は、一連の行動を想定していなかったかもしれません。しかし、自社の資料価値に向き合うだけでなく、自分たちが作成した現用文書・非現用文書もなんとかしようと考えられるようになったのは、ひとえに彼らの会社への愛着をもってのことです。そのスイッチを押せたのが、外部者として客観的な視点を持てる筆者だったように思われます。

(2) 国立大学のアーカイブズ

次に、筆者は東京大学文書館^{※2}に所属し、東京大

学が作成した歴史的資料の移管、整理、保存に関わる業務の他、閲覧利用対応や公開審査業務、環境整備などを行いました。東京大学文書館は2015（平成27）年4月、国立公文書館等の指定を受け、保存期間満了後の法人文書を特定歴史公文書等として受け入れる機関に生まれ変わりました。これにより、東京大学文書館は、東京大学の組織活動を通じて生み出された文書・記録の保存と公開の責務を担うようになりました。スタッフは、東京大学が作成する文書に対して、下記のことをよりシビアに見つめ、文書作成当時の状態を維持し、後世へ伝えるための取り組みに重点を置いています。【〇〇は】の「〇〇」については、皆さんの職場・部署に当てはめてみてください。

- ① 【〇〇は】どのような業務を行ってきたのか
- ② 【〇〇は】何のために行ってきたのか
- ③ 【〇〇は】どのような方法で行ってきたのか
- ④ 【〇〇は】どうやって行ってきたことを残したか

4. 学習院のアーカイブズ

これまでご紹介したアーカイブズは、自分たち（個人・組織）が過去に何を、どのような方法で実施したのかを参照するためにアーカイブズがあるという点で、共通していると考えられます。この根っこの部分を大切に、学習院の皆さんと日々生み出される記録がアーカイブズの種となる楽しさを分かち合い、共に育みたいと思います。



図2 学習院アーカイブズの扉

※1 次を参考：“Archives”, Multilingual Archival Terminology, ICA. <http://www.ciscra.org/mat/mat/term/64>.

(アクセス日：2020-06-14。以下同じ)

※2 東京大学文書館ホームページ：
<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

主な活動（2020年2月～2020年6月）

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（4部署）

◆学内各部署に保存されている資料の調査・受入・整理

- ①調査・整理：初等科所蔵資料（3月26、27日）
- ②受入：大学計算機センター竣工写真アルバム

◆所蔵資料の整理・保存

- ①広報用ポジフィルム（昭和46～62年）約4,000点
- ②学内刊行物、書籍
- ③自動演奏ピアノの維持管理

◆受贈・購入

- ①受贈：学習院弓道部創部百周年記念誌『弦鳴』編集収集資料、幼稚園開設時安倍能成文書・写真
- ②購入：游泳・遠泳証書（中等学科、明治30年代）



弓道部（昭和10年代）

◆講演会、教育・広報支援等

- ①学習院アーカイブズ講習会「歴史資料からわかることー初等科所蔵史資料の調査からー」（2月13日、参加者：初等科教職員50名）



- ②女子部「高Ⅲ自由講座」での秩父宮ラグビー場（女子学習院跡）見学（2月19日）
- ③女子部 中3道徳授業「資料からみる女子部の歴史」（2月20日）
- ④『学生生活の手引』、大学案内パンフレット等への編集協力
- ⑤新任職員研修「学習院の歴史ーその始まりと戦後の再出発ー」（4月2日）

◇目白キャンパス内建造物についてー北別館ー 明治42（1909）年竣工 国登録有形文化財



改修後の北別館外観（2020年6月撮影）



改修中（通用口側：2019年8月撮影）



改修後（同左：2020年6月撮影）

北別館は、学習院中等学科・高等学科の目白移転時に、図書館として建設されました。文学部棟（北二号館）の建設にともない、昭和53（1978）年に改修・移設され、平成31（2019）年3月まで大学史料館として使用されました。その後、同年4月より行われた耐震・改修工事は、明治期の設計に基づく大規模な工事となりました。現在は大学図書館情報管理課によって使用されています。

学習院アーカイブズ・ニュースレター第16号 2020（令和2）年7月15日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）
事務室 西5号館（本部棟）地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>